

銚田市に住む外国人と彼らを支える人たちの存在 —働く外国人技能実習生の実態と今後の課題—

村上 朋映

1. 身近にあるグローバル問題へ関心

大学に入学して2年間で過ぎた現在、授業では戦争問題、貧困問題、宗教問題、人種差別の問題、多文化理解に関する問題など、国際社会に関係する様々な社会問題について学んできた。その中で特に興味を抱き始めたのが、世界の問題というより、日本の地域に根差した身近なグローバルな問題である。例えば、外国人児童生徒や外国人労働者の問題などだ。そして同時に、わたしは自分の地元である茨城県銚田市についてももっと知りたいという思いを抱くようになった。これらの背景から銚田市について調べていくと、自分が今まで知らなかった事実を知ることとなった。それが、いわゆる外国人技能実習生の存在だ。銚田市では、主に農業の分野において外国人技能実習生を受け入れ、その数は日本全国と比べても非常に多くなっていることがわかった。たしかに、自分が銚田市に住んでいたころ、小学校の通学路では畑で日本人の高齢者と共に働く外国人をよく見かけたり、高校の通学で利用していた大洗鹿島線ではたくさんの外国人が、わたしと同じ新銚田駅で乗り降りしていたりしたことを思い出すと、銚田市に住む外国人の割合が高いことが納得できた。

しかし、実際に彼らが銚田市に住んでいる理由、住んでいる場所、取り巻く環境については何も知らなかった。銚田市に住む多くの外国人が技能実習生という立場であることを知り、日本全体で外国人の不法就労、非正規滞在者の存在が問題視されていることを授業で学んだことをひとつのきっかけとして、銚田市における外国人労働者の問題について今回自分なりに調査を試みた。高齢化に伴い、銚田市の産業を支える農家の衰退が重要な問題として頭を悩ます銚田市が今後、外国人実習生に頼っていくことは避けられない事実であり、現段階で支えられている部分が大きいという現実には、銚田市役所の方の聞き込みを通して明らかになった。

以下、外国人技能実習生の問題の実態、銚田市内での取り組み、今後の課題について実際に調査してきたことをまとめ、最後に自分なりの考えを述べておく。

2. 日本の技能実習制度とは

日本における外国人の技能実習制度は1993年に創設されたものであり、厚生労働省によると、我が国が先進国としての役割を果たしつつ、国際社会との調和ある発展を図っていくため、技能、技術または知識の開発途上国への転移を図り、発展途上国高の経済発展を担う「ひとづくり」に協力することを目的としている。つまり、開発途上国の青壮年労働者を一定期間日本で受け入れ、産業上の技術等を習得してもらうことで、自国へ帰ったとき経済発展・産業振興の担い手となる人材の育成を促進させるということだ。しかし、これはあくまで建前上の目的であることを主張しておきたい。発展途上国の今後の発展のための技術の伝授は表向きの目的であり、受け入れ側である日本側の本来の目的は、日本国内の単純労働分野において安価な労働力を取り

入れることだ。雇用開発センターが、過去または現在において技能実習生を受け入れている企業を対象に実施した調査（2002年12月実施）によると、技能実習生の受け入れの目的は、「人件費の削減」（52.2%）と「人手不足の解消」（49.3%）が多くなっていることが明らかになっている¹。

これは、銚田市内においても技能実習生を雇用する農家などが高齢化に伴い経済的にも労働力的にも厳しい状況下にあるということを考慮すると、同じような理由で雇用している人が多いといえよう。日本では、外国人労働者を単純労働者としては受け入れていない。しかし、実際にはたくさんの外国人が非正規労働者として低熟練技能分野において安い賃金のもとで働いている現状がある。日本政府はこの事実に対して「見て見ぬふり」をして自国の都合のいいように安価な労働力を利用しているように見える。さらには、低熟練技能分野においては外国人労働者が労働市場にいないという非現実を都合のいい理由とし、単純労働分野における労働を認めさせた技能実習生という存在を生み出す制度をつくったのだ。正規労働者であり、より安価な労働力であることを理由として彼らは単純労働分野において厳しい待遇のもとで利用されている。

3. 銚田市に住む外国人技能実習生

前項では外国人技能実習生の日本全体として国が抱える問題について述べたが、次に銚田市に焦点を当てて銚田市の技能実習生の実態について詳しくみていく。今回調査するにあたって、銚田市役所で外国人に関しても担当しているという企画課の高森さんという方に資料提供を依頼し、直接お話を聞く機会を頂くことができた。以下は、頂いた資料と高森さんの発言をもとに、銚田市の実態についてまとめたものである²。

まず、銚田市にどのくらいの外国人技能実習生がいるのかを把握しておきたい。表①³によると、2017年4月1日現在で技能実習としての在留資格をもって銚田市にいる外国人の数は1,842人である。内訳としては、中国人（36.6%）、ベトナム人（29.5%）、インドネシア人（19.8%）が多数を占めている。また、技能実習としての在留資格をもって転入してきた外国人の数についても資料を頂くことができた。このデータによると、中国人の割合が2012年では69.0%だったのに対し、2016年ではその割合は48.3%に減少している。一方でベトナム人の割合が2012年で10.7%であったが2016年では24.1%と高くなっていることがわかった。

ここで言及しておきたいのは、まず2017年4月1日現在における外国人実習生の数を表すデータが、あくまで表面上であるということだ。実際には、実習先から逃亡する人、もっと稼ぐために実習先を転々としている人など、いわゆる在留期間を過ぎ

表①技能実習生を目的とした在留資格をもつ外国人の数

国籍	人数	割合
中国	675	36.6%
ベトナム	544	29.5%
インドネシア	364	19.8%
タイ	66	3.6%
カンボジア	128	6.9%
フィリピン	38	2.1%
ネパール	4	0.2%
ラオス	9	0.5%
ミャンマー	12	0.7%
モンゴル	2	0.1%
合計	1842	100.0%

銚田市役所実施 2017年4月1日現在

でもなお滞在する非正規滞在者の存在が数値として現れていないのである。高森さんも、このデータはあくまで表面上のものであり、実態は把握し切れていないのが現状であると述べていた。さらに、技能実習生の転入の数はデータ化されていても、彼らがきちんと在留期間を守って帰国したかを表す転出に関してのデータがないということからも、非正規滞在者の存在が否定できないこと、その実態が把握できていないことを示している。実際に高森さんの話の中で、「外国人技能実習生の問題は非常にグレーな問題である」と述べている。

実際にどのくらいの非正規滞在者がいるのか、また彼らがどこでコミュニティをつくって生活しているのか、その実態はまったく把握しきれていないというのが現状なのだ。その背景としては、「あくまで実習生側と雇用者側との関係でやり取りが行われているため、雇用者側から市役所には情報が回ってこないということ、一方で非正規雇用を取り締まる警察側、入国管理局側からは市役所は雇用者側の住民との関わりが深いのではという恐れから非正規雇用、非正規滞在に関する情報を伝えない姿勢をとっているという現実がある」と高森さんは述べる。更には、この問題が銚田市において非常にグレーであるもうひとつの背景として、「日本が国全体として外国人労働者に対してきわめて曖昧な態度であり、非正規滞在者の存在を「見て見ぬふり」をしているような姿勢を示していることも我々が非正規滞在者の問題を明らかにすることができない理由として考えられる」と説明した。

4. 浮かび上がる問題

前項で挙げた銚田市における技能実習生の実態、それに加えて自らが銚田市内で生活してきたなかでみてきた光景をもとに、どのような問題が潜んでいるのかを考えてみる。まず、技能実習生の数、コミュニティが把握しきれていないということから、防災面において対応できないということだ。東日本大震災のとき、銚田市でもライフラインがとまり、地割れがあちこちで起こった。そんな中、外国人が品物が店内に散らばるスーパーにて食料品をはじめとする沢山の商品を盗んでいったという情報を耳にした。この事実を知った当時、祖母をはじめとし数々の大人たちは外国人を大きく批判していたこともあり、私自身一方的に外国人は常識はずれだという偏見を抱いていたことは否定できない。しかし今考えてみると彼らは避難所もおそらく分からず、さらに非正規滞在者であれば公式的な支援を受けに行くこともためらう彼らにとって、生きていくためには強国手段を用いるほかなかったのではないだろうか。この事例から、技能実習生の実態を性格に把握しなければ災害時の対応ができないことがいえる。

また、技能実習生の労働環境が非常に悪いという問題も取り上げたい。私自身が大学生になって宇都宮市から銚田市へ帰省したある日、家の近くで軽トラが荷台に二人の外国人女性を乗せて走行している光景を見た。その女性二人は目も開いてないような状態で非常にぐったりとした印象だった。「アメリカ側から、日本の技能実習生制度が現代の奴隷制度だという批判がある」（香川、桑原 2008）⁴という話があるが、軽トラの荷台に乗せられる彼女たちの光景は、これを象徴付ける光景ではないだろうかと思わされる。実際に労働環境があまりにも厳しく、それに耐え切れなくなった技能

実習生が逃走するニュースは取り上げられており、雇用者側への監督強化を早急に進めてかなければならないと考える。

そして最後に、地域住民が抱く外国人への偏見・差別的見方が子どもたちへも影響しているということを問題とし挙げたい。銚田市に住む、高齢者をはじめとする大人たちは、技能実習生として短期間のみ銚田市に住む外国人によりイメージを抱いていないと感じる。「黒んぼには近づくな」、「近くのアパートに外国人が引っ越してきたんだって、気をつけてよ」このような発言が日常的に子どもたちに向けられており、実際にわたしにも言われてきた。たしかに、技能実習生による下着泥棒、更には技能実習生同士の殺人事件までもが起っており、外国人に対して敏感になり、危機意識をもつことは仕方がないことかもしれない。

しかし、「共生」という言葉をもっと住民側にも考えさせていくべきではないだろうか。銚田市の農業を発展させていく上で、技能実習生に頼らざるを得ない状況は明らかであり、今後も高齢化に伴う人口減少の中で外国人を否定的に考えるのではなく、肯定的に考え、協力した産業発展を目指していく必要があると考える。そして、子どもたちに浅はかな差別的発言をすることを避け、外国人との「共生」について学ぶ機会をもっと設けていくべきである。

5. 外国人をサポートする市民

今回の調査を進めていく中で、銚田市に住む外国人を支援する団体があるということを知った。それが民間の国際交流団体として2000年から活動が始まった

「ほこた日本語クラブ」である。今回、銚田市国際交流協会の理事長であると同時に「ほこた日本語クラブ」の代表者である吉田さんに直接お話を伺わせていただくと同時に、日本語教室を見学させて頂く事ができた⁵。日本語教室は毎週水曜日に開かれており、開講当初は15人ほどの生徒数であったが、現在、2017年6月の段階で40人ほどまでに増えているという。日本語指導に限らず、異文化間交流として陶芸体験ツアーを開いたりスポーツ大会などを行ったりもしている。教えている側は10名ほどであり、もともと日本語教育に携わったことがなかったが、関心をもったことで日本語教育について学び、ボランティアとして教えている方がほとんどだそうだ。

そして、わたしが今回の調査を通して一番驚いたことは、生徒のほとんどが技能実習生であったことだ。つまり銚田市に定住する、もしくは永住予定の外国人の方や外国人児童が学びにきているのかと考えていたため、短期滞在者である技能実習生が通っているということが予想外であった。割的にはベトナム人が多く、中国人やインドネシア人も次いで多く見られる。彼らは自身のコミュニティ間での口コミによって日本語教室の存在を知り、訪れる。生徒の中には、隣町からわざわざ自転車で来る人もいて、この教室の存在がいかに彼らにとって大切であるかを感じさせられた。

また、授業の様子を見学して感じたのは、生徒たちが非常に熱心であること、そしてなにより外国人の方みなが挨拶をすごくしっかりしていて、突然見学に来たわたしにも笑顔で「こんばんは」と声をかけてくれたり、先生に対してのお礼の言葉をきちんと伝えたりしていることがすごく印象深かった。見学している私と一緒に教科書を見ようと差し出してくれたこと、私自身に分からないところを質問してきたこと、私自身の質問に笑顔で答えてくれること、このような彼らの行動や表情ひとつひとつが

すごくいきいきとしていると感じると同時に、私自身の技能実習生に対するイメージが偏見であったことを痛感させられた。今回の吉田さんへのインタビューの中で、「実習生の滞在期間をもっと増やしてあげたいということを切実に思っているが、それが国の方針上現実的考えてなかなか難しく、もどかしさを感じる」と述べていた。根本にある問題を解決することは難しい状況のなかで、けして規模は大きくないが、そこには外国人技能実習生と鉾田市民が共に楽しい時間、有意義な時間を共有している場が確かにあった。

6. 今後鉾田市はどうすればいい？

今回「ほこた日本語クラブ」の活動の様子を見学し、もっと技能実習生と鉾田市民が雇用者一労働者という立場とは違った関係性をもって関わる機会を設けていくべきだと考えた。非正規滞在者の問題を解決するに当たって鉾田市だけでの努力では不可能に等しい。しかし、技能実習生をただの安価な労働力として考えるのではなく、共に鉾田市の産業を支える一存在としてみなし、その関わり方を改善していくことはできるのではないだろうか。そのような思考の変化が、技能実習生の仕事場からの逃亡を防ぐと同時に、彼らのためにも在留期間を守らせた雇用形態が整備されることへつながってくると考える。たとえば、スポーツ大会の開催や、学校で地域の人に参加を呼びかけて行うお祭りや餅つきなどの行事に、外国人を呼びかけて共に楽しむ機会を設けるべきだ。今回の日本語教室を見学したことから、技能実習生たちが治安を脅かすような危険な存在であるということがまったくの偏見であるということを実感したからこそ、このような企画を提案したい。

また、現在、東京オリンピックにおいてベトナムのホストタウンとして茨城県と鉾田市が共同で立候補しているということを高森さんから教えていただいた。ベトナム人の技能実習生が増えているということで、鉾田市、更には茨城県全体の農業の発展の為に、今後のベトナムとの関わりをより深くよいものにするよききっかけとなるということで立候補に踏み入ったという。このように、外国との関わりを積極的に行い、技能実習生を活かした鉾田市の新たなまちづくりへの挑戦は、外国人のサポートかつローカルな人たちからの理解を得ていくという点で決して簡単な取り組みではないであろう。だが少子高齢化に伴う人口減少、地域の衰退が今後顕著となっていくなかで、他の地域から一歩先へ出たまちづくりへの挑戦をしていくべきであると考え

7. 調査を経て感じたこと

今回の調査を通して一番強く感じたのは、やはり外国人技能実習生の問題が非常にグレーであるということだ。調査する前の段階では、市役所側ではある程度の不法滞在者の数や労働環境が悪いという現状を把握しているのかと勝手に推測していたが、実際は全く現状がつかめていないどころか、むしろこの問題に対して消極的のように感じた。その背景としては、日本政府自身が、外国人労働者に対して曖昧で都合のいいような態度を示していることが挙げられるだろう。

また、「ほこた日本語クラブ」の活動の見学から、鉾田市内において外国人に対する差別的意識、偏見が広がっているということを感じた。礼儀正しく、熱心に日本語

を学ぶ技能実習生の姿はととも輝いていて、彼らを悪者のように、部外者のように扱うことはあってはならないはずだ。長年銚田市に住み続け、地元を愛する方々に外国人との共生を理解してもらうことは簡単にはいかないだろう。しかし、少子高齢化の進行が防げない現実において、銚田市の農業を維持、発展させていくためにも、そして銚田市が新たな魅力を得るためにも、外国人技能実習生の受け入れについて積極的に取り組んでいくべきであろう。

¹鈴木江理子『日本で働く非正規滞在者－彼らは「好ましくない外国人労働者」なのか?』(明石書店、2009年4月)

² 2017年6月7日における茨城県銚田市企画課 高森氏へのインタビュー

³ 銚田市役所実施 国別集計 2017年4月1日現在

⁴ 香川孝三・桑原靖男『外国人労働者と地域社会の未来』(公人の友 2008年10月)

⁵ 2017年6月7日 ほこた日本語クラブ訪問および吉田氏へのインタビュー